

創世ホール通信 No. 255

催し案内 + 文化ジャーナル
2016年4月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール
電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180
771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎



徳島クリエイターズマーケット

4月9日(土)～10日(日)

10時～17時 *最終日は16時終了

会場●2階ギャラリー

主催●徳島クリエイターズマーケット事務局(川久保☎080・3162・2234)

■凄腕の「モノづくり人」たちが全国各地から集うマーケット。本町在住の川久保貴美子さんが呼びかけて実現。川久保さんは、脱力系癒しキャラ《ししゅもねこ》を造形し、今や全国区にまで育て上げた超ユニークなアーティストです。ご注目ください。



防災ビデオ★アンコール上映会

東松島市からのメッセージ

～震災を語り継ぎ未来を創造するために

4月16日(土) 13時～13時45分

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

主催●北島町立図書館・創世ホール(☎088・698・1100)

■震災直後から東松島市図書館が市民の体験談や被災写真等を収集した資料を仙台放送がまとめた映像記録集を上映します。3・11に上映し好評だったのでアンコール上映するものです。

もうすぐ傘寿★おろおろの旅の雫パート②

近藤恭子木偶人形・水墨画個展

4月30日(土)～5月1日(日)

10時～17時

会場●2階ギャラリー

主催●近藤恭子(☎088・698・2286)

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

■北島町新喜来の近藤恭子さんが、自作の木偶人形17点、水墨画10点を展示。2012年春に続き、2度目の個展を開催します。近藤さんは、元教員で元気いっぱいなおばあちゃんですが、人形製作の高度な技術には仰天必至！ご注目ください。

第3回◎東京音楽大学校友会 徳島県支部コンサート

4月30日(土) 13時半～(開場13時)

会場●3階多目的ホール

入場料●1000円(前売当日共)

出演●川原由衣(ピアノ)、猪子奈実(ヴァイオリン)、片山海(チェロ)、佛圓彩乃(ピアノ)、山崎泰寛(パーカッション)、竹内友里恵(ヴァイオリン)、渡邊礼華(ピアノ)

【ゲスト出演】中野真理(フルート、東京音楽大学准教授)、伊賀あゆみ(伴奏)

主催・問合せ●東京音楽大学校友会徳島県支部(☎080・2971・8512)

創世ホール名画鑑賞会 ②③

池谷薫監督作品「ルンタ」

5月21日(土) 2回上映

①10時半～ ②14時～

会場●3階多目的ホール

入場料●大学生・一般/前売1000円(当日1300円)、小・中・高 & シニア(60歳以上)の方は当日のみ1000円

作品●「ルンタ」(2015年、日本) 監督=池谷薫

主催●創世ホール名画鑑賞会実行委員会(☎088・698・1100)

■願いは風にのり天空へ——■非暴力の闘いに込められたチベット人の心を描く衝撃のドキュメンタリー！
■チベット《焼身抗議》……心優しき遊牧の民に今何が起きているか、あなたはご存じですか？■チベットでは中国の圧政に対して自らに火を放ち抵抗を示す《焼身抗議》が後を絶ちません。その数141名(2015年3月3日現在)。今も多くの命が失われています■映画タイトル「ルンタ」とは。チベット語で《風の馬》を意味し、天を翔け、人々の願いを仏や神々のもとに届けると信じられています■ブラッド・ピット、リチャード・ギア、マーティン・スコセッシ、ハリウッドも支援するチベット人の非暴力の闘いとは？■映画は不屈の精神を持つチベット人たちの声を拾いながら、彼らの熱き想いを映像に刻み込んでいきます■暴力によるテロが世界を席卷する今、非暴力の闘いに込められたチベット人たちの、誇り高いメッセージ。ぜひ耳を傾けてください。

海野十三忌◎2016★片山真一講演会 海野十三と暗号、虫食い算

数 学 研 究 者 の 視 点 か ら

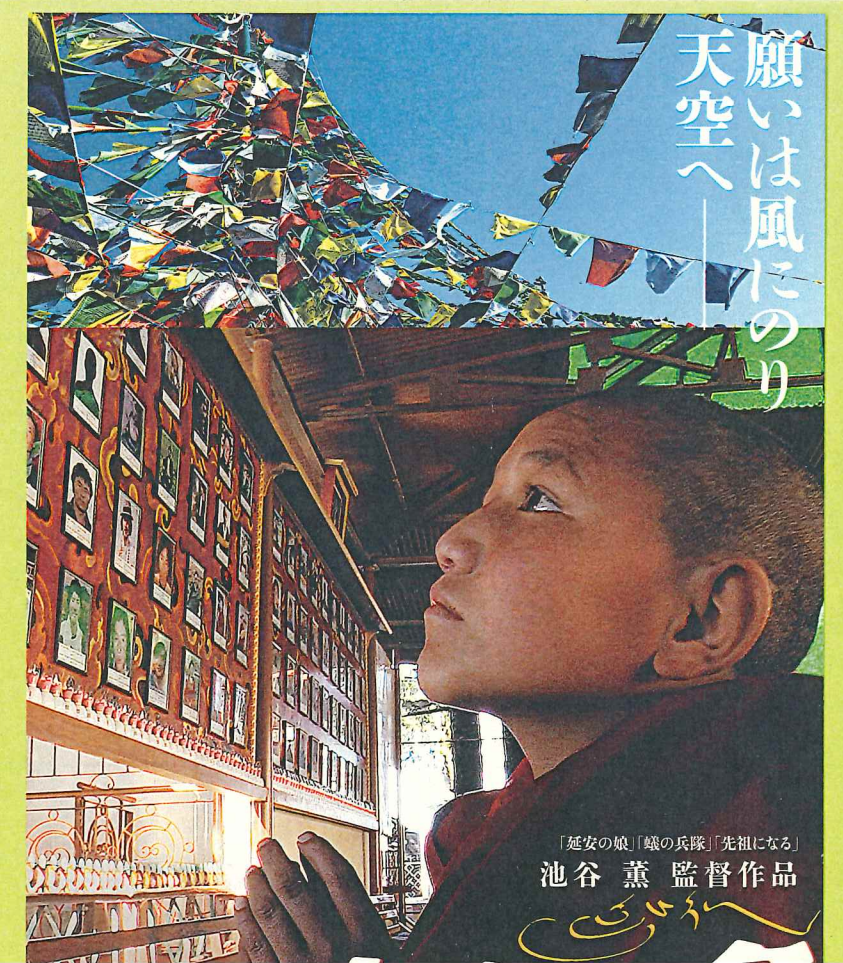
5月22日(日) 14時半～(開場14時)

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

講師●片山真一(徳島大学理工学部教授、理学博士、整数論、徳島科学史研究会会員 59歳)

主催●海野十三の会(小西☎080・6386・2946)

■徳島が生んだ日本SFの父・海野十三は早稲田理工科出身で、科学トリックの探偵小説を多く発表した。また本名佐野昌一名義で『虫食い算大会』の著作もあり、数学分野にも造詣が深かった。講師片山真一氏は、京都大学大学院修了の気鋭の数学者にして徳島大学理工学部教授。この講演会は、海野の暗号小説や虫食い算など数学パズルの側面にスポットを当てて、その作品世界を解析する画期的なものである。多数ご参集ください。



「延安の娘」「蝶の兵隊」「先祖になる」
池谷 薫 監督作品

■『太平洋雷撃戦隊』というのは、日本が某国と戦争に入って、この某国というのは明らかに米国のことなんですが、太平洋にいた日本軍の潜水艦が大活躍するという小説です。むしろまだ太平洋戦争は始まっていませんでしたが、海野十三(うんのじゅうざ)は昭和8年の時点で、日米開戦を予言するような小説を書いていたこととなります。一方の乱歩は、昭和11年に『怪人二十面相』で同じ『少年倶楽部』に登場しますが、この雑誌では十三が先にデビューを果たした先輩であったわけです。昭和8年に少年向けの軍事小説で少年雑誌に登場した十三は、それ以前には探偵小説に手を広げていました。

■日本の探偵小説は、大正12年に江戸川乱歩がデビューしたあと、昭和4年あたりで、つまり乱歩が『蜘蛛男』を発表したあたりで移行期を迎えました。『蜘蛛男』などの作品を乱歩はみずから《通俗長編》と呼んでいますけれども、探偵小説本来の謎解きの面白さから離れた、犯罪者の異常な心理であるとか、残虐な殺害方法であるとか、乱歩がそういう面白さを追求した作品を書き始めたことで、日本の探偵小説全体がそういう方向に移行していったわけです。

■日本の探偵小説がどう変化していったかということを確認したうえで、乱歩と十三が探偵小説をどう考えていたかを見ていきたいと思います。まず昭和9年、十三は「探偵小説管見」という文章を発表しました。これは当時の探偵小説界の状況を十三なりに見渡して、管見というのはちょっとへりくだった言い方ですけど、私は今の探偵小説をこう見て、こう考えています、というようなことを書いた文章です。資料をご覧ください。

■「思うにわが日本人ほど、種類の多い探偵小説を書く人種は外にいないのではあるまいか。日本人がそれを好むのは、一つはその天性によるものである。外国では専ら純本格の探偵小説が流行る。それらの主体は皆トリックである。／外国の読者は科学常識が進んでいて、謎を解くことに誰もが相当の興味を感じるのである。だから純本格物の多いのも道理である」と十三は書いております。

■外国、つまり英米では純本格の探偵小説が主流であり、あくまでも謎解きを主眼にした探偵小説が流行っている。ところが日本がそうではない。謎解きの興味だけに重きを置かず、さまざまな種類の探偵小説が書かれている。例えば先ほども申しました犯罪者の異常心理を執拗に描写するような作品ですね、そういう謎解き以外の要素に焦点を当てた小説がたくさん書かれていると、十三は日本の探偵小説を分析していました。

■要するに、日本人はあまり論理的ではない、ということです。十三は、と申しますか、当時の人たちはそういう風な見方をすることが多かったようです。欧米人は頭が論理的で合理的であるから、探偵小説もトリックを中心とした純本格がメインになりますけれど、

日本人はそうではない。十三の弁を借りれば、「わが国の読者は文芸的には外国の読者階級よりも遥かに秀でていますが、科学的では外国に於いて見るが如きほど普及していない」ということとなります。

■日本人は文学的な素養や感受性は外国の読者よりも優れているが、どうも科学性とかあるいは論理性・合理性では欧米人には及ばない、というのが十三の見るところであって、日本の探偵小説にもそういう傾向が強くて出ていたわけです。しかし十三は「わが国の探偵小説に変格の多いことをそんなに慨(なげ)いてはいない。むしろ変格の多いという事に探偵小説の将来性を認めている」とも書いております。変格というのは文字通り本格ではないということで、謎解きを主眼にした本格以外のさまざまな探偵小説が、ひとくくりに変格作品と呼ばれていました。

■変格は別に悪いことではない、というのが十三の考えでした。日本人なりに探偵小説を消化して作り上げた結果、そうなっているのであるから、「もっと勇敢に、新しい型を求め、此处ぞと思う方向にドンドン拡大してゆくのがよいと考えるものである」と主張して、本格一辺倒になることなく、作家それぞれの趣味や好みに応じて独自の探偵小説を追求すればいいのである。それが十三の主張でありましたし、当時の日本の探偵小説は、まさにそのとおりの状況を示しておりました。

■江戸川乱歩もそういう認識に立ち、そうした状況を肯定する立場を表明しておりました。資料に乱歩の「日本の探偵小説」という評論を載せておきましたが、ここで乱歩は日本の探偵小説について「特殊の発達を見た」と指摘しております。「特殊の発達を見た我々の探偵小説界では、一般に探偵小説雑誌『新青年』出身の作者を、その作品の傾向が如何にあろうとも、『探偵作家』という一(ひと)いろの名称によって呼ぶ慣(なら)わしとなっている」というわけです。

■『新青年』に小説を書いた作家は、すなわち探偵小説作家である、というのが当時の一般的な認識でした。たとえそれが謎解きには関係のない小説であっても、『新青年』に登場した作家はみんな探偵作家と位置づけられ、その作品はひとまとめに変格と呼ばれるジャンルに分類されてしまいました。それが当時の風潮であって、しかも「我々の所謂(いわゆる)探偵小説壇は、純粋の探偵小説と同時に、或はそれ以上に、犯罪小説、怪奇小説などに於ても、世界の水準に比べて決して見劣りのしない作品を生んでいる」と乱歩は書いております。

■本格的な探偵小説とはいえない犯罪小説や怪奇小説なども、日本においては全部探偵小説というジャンルにくくられてしまって、もうごっちゃになっているのであるけれども、それは日本独特の特殊な発達であると評価していいのではないかと、というのが乱歩の意見であって、資料にある「日本探偵小説の多様性について」という評論で、乱歩は「日本探偵小説の多様性は、必ずしもそれに犯罪、怪奇の文学が混じっているからばかりではない。探偵小説そのものも作家の色分けの多様性に於て出発以来僅々(きんきん)十年余りにしかならない我々の探偵小説界は、何十年の歴史を持った英米のそれに比べても決して遜色がないと云っていい」と述べております。

■日本の探偵小説はわずかに十年あまりの歴史しかないけれども、英米の作品に比べて遜色がない、見劣りしない、それなりに面白いすぐれた作品が書かれている、と乱歩は見えていました。ただしそれは

謎解きに限った話ではなくて、もっと広い視野で見た場合の話でありまして、乱歩はこの評論の最後をこう結んでいます。

「論理探偵小説はあくまで論理に進むのがよい。犯罪、怪奇、幻想の文学は、作者の個性の赴(おもむ)くがままに、いくら探偵小説を離れても差支はない。そこに英米とは違った日本探偵小説界の、寧(むし)ろ誇るべき多様性があるのではないか。

■乱歩はここで、十三が書いていた「此处ぞという方向にドンドン拡大してゆくのがよいと考えるものである」という主張と同じ意味のことを述べています。謎解きだけに縛られるのではなくて、それぞれの個性に応じて、探偵小説ではない怪奇小説や犯罪小説の方に自由に進めばいいのであると、そこにこそ日本の探偵小説が誇るべき多様性があるのであると、そういうことです。それは、日本という島国に探偵小説が輸入されて、そこに根付いて、芽生えて、さまざまな花が開いた姿を肯定的に認めようという立場です。

■要するに、「ガラパゴス化」というやつですね。「携帯電話のガラパゴス化」ということが、今言われています。携帯電話が普及していく過程で、日本独自の機能を発達させた携帯電話が生み出されて、それが「ガラパゴス携帯」と呼ばれています。ガラパゴス諸島によそから入った生物が、その島だけで特殊な発達をして、特殊な生物相が作られたという現象を踏まえてそう呼ばれているわけですが、戦前の日本の探偵小説はまさしく独自の発達をとげてガラパゴス化しておりました。謎解きを主流にした探偵小説が、いつの間にか怪奇や犯罪・異常心理やその他もろもろの多様なテーマを扱ってガラパゴス探偵小説になっていたということです。それを十三も、それから乱歩も認めていて、しかもそれを肯定していたというのが今まで見てきたところです。日本の探偵小説は多様であっていいのではないかと、ということですね。

■ただし乱歩は、「海野君のこと」という随筆に「海野君は探偵小説ではルブランが好きであった」と書いております。「コチコチの論理ものよりはルブランのやうな面白いものをといふのが彼の主張で、(略)海野君は探偵小説通俗論では甲賀君と意見を同じくした」。つまり通俗であってよいという考え方です。十三は謎解き一辺倒の本格ものだけが探偵小説ではないという考え方に立っていて、「できるだけ探偵小説の範囲を広く考へやうとした。それはよいのだが、勢ひ余って『新青年』出身作家の書くものは悉(ことごと)く探偵小説なりといふやうな口吻(こうふん)をもらすこともあり、その点は私には同感できなかつたので、『鬼の言葉』でもそれに触れ、会合の席などでも海野君と議論したことがある」と乱歩は書いています。

■つまり十三と乱歩は、日本の探偵小説の現状を肯定的に認識している点では同じだったんですけども、乱歩は本格は本格として認め、それ以外の犯罪小説・怪奇小説などはあくまでも探偵小説の範囲の外に置いて考えていました。しかし十三は、本格以外のものもすべて含めて探偵小説であるという考えでした。それで、そうした考え方の相違から、探偵小説をどう見るか、どう考えるかということについて、会合の席などで海野君と議論したことがあると乱歩は記しているわけです。

■しかしこれは、二人の仲が悪かったということではまったくありません。(次号に続く)